

富士山の環境と防災を生かした地域活性化策

—地域課題解決型の部活動に向けた取り組み—

裾野高校郷土研究部

1. 問題の所在

裾野高校の郷土研究部は、部員31名（1年15名、2年10名、3年6名）と大所帯ではあるが、実質的に活動している生徒は限られている。「クラブ活動全員加入」という方針のもと、在籍だけしながら週1回のクラブの時間にすら顔を出さない生徒も存在するが、除籍にしても他に受け入れ先がなかったり、逆に他のクラブを除籍になって「最後の砦」として郷土研究部の門をたたくような生徒もいる状況である。

かつては全国大会にも出場し、一時は「環境防災倶楽部」の名で防災教育の分野では優れた実践を重ねてきた時期もあったが、活動は低迷を続け、高文連の県大会にも出展できない時期が、ここ2年続いてきた。

それでも何人かの生徒は好奇心が旺盛で、地域に密着した活動をしたいという意欲が見られた。彼ら彼女らを核として、これまでの「郷土研究」とは違ったアプローチで活動を展開し、今年こそは「県大会」での報告を意識して活動してきた。

2. 本年度の活動

(1) 「夏合宿」の復活

防災教育に熱心に取り組んでいた前顧問の時代、毎年夏に「防災合宿」を行っていた。体育館に段ボールを敷いてその上で寝泊まりし、非常食を調理して図上防災訓練を行うというものである。近隣の小学校と連携して大規模に展開した年もあったが、前顧問の転出と共に途絶えてしまっていた（現顧問も、顧問ではなかった

が手伝いで参加した）。今年、この「合宿」を復活させようと部員に呼びかけ、部員8人が参加を表明し、令和元年7月30、31日の2日間で実施した。

合宿のテーマは「防災」に留めるのではなく、「地域の魅力に目を向けて味わう」とし、日中はマイクロバスを借りて裾野市内を巡検し、行く先々で調達した食材を学校の調理室で自ら調理して味わい、講堂（100周年記念ホール）で寝泊まりする合宿とした。

日中の訪問先は以下の5か所である。

- ①裾野市立富士山資料館（火山の成り立ち・富士山信仰）
- ②十里木別荘地（地下1500mからくみ上げられる天然温泉の井戸）
- ③富士山こどもの国（富士山の側火山群の南限の噴火口）
- ④富士山グリーンファーム（耕作放棄地を使った野菜の高設砂地栽培）
- ⑤猟師さんより猪肉を頂く

合宿に先立ち、静岡新聞から高校生による防災関係者への取材をもとに特集記事を出す企画（チーム・パディ：令和元年8月30日号）を頂いた。裾野市立富士山資料館で富士山の火山活動に関する講義を受け、富士山南麓の噴火口群の中で最も南側に位置する「富士山こどもの国」内の火口丘や、地下1500mからの深層地下水の探掘に成功した深井戸などを訪ねた（写真1～3）。



写真1～3 裾野高校郷土研究部の夏合宿①
 (左から：裾野市立富士山資料館・富士山こどもの国噴火口・十里木別荘地内温泉掘削井戸)

食材の調達先として、耕作放棄地を使って野菜の乾地水耕栽培を行っている「富士山グリーンファーム」社、罫罫で野生鳥獣の駆除に取り組みされている裾野猟友会の会員の方のお宅を訪

問した。集めた食材は、温泉水を使って調理し、カレーライスと野菜蒸しを作って食した。調理実習には地元の婦人会の皆さんに手伝って頂いた(写真4～6)



写真4～6 裾野高校郷土研究部の夏合宿②
 (左から：富士山グリーンファーム・猪肉のカレー・野菜と猪肉の温泉水蒸し)

(2) 駅前空き店舗を使った研究展示と販売実習

裾野高校では、「1部活動1ボランティア」の方針の下、地域からのボランティアの依頼に対して部活動単位で対応している。合宿の調理実習に参加していただいた地域の方から声がかかり、毎年9月上旬に行われている「富士山すその阿波踊り」で、合宿の時に調理した「野菜の温泉水蒸し」を出してみても？との声かけを頂いた。フィールドワークで伺った温泉水を扱っている会社がペットボトルで水を売り出しており、商品のPRを兼ねて行うボランティア活動である。

会場として、裾野の駅前商店街にある空き店

舗をお借りした。昭和初期に建てられた陶器店で、現在は、秋の祭りの時にだけ店を開けている。ここを販売場所として、ジャガイモを温泉水で蒸して提供し、大盛況のうちに終わることができた。

この時の成功体験を生かし、生徒が「またやってみよう」との声が上がり、今度は郷土研究部独自の企画として、活動の展示と商品販売を10月19日と1月18日に行った。地元で洋菓子を製造販売している障がい者団体から仕入れた焼き菓子、自動車部品の矢崎総業の地域貢献事業として設置された農場で生産された野菜や農産加工品など、地元ゆかりのある商品を販売し、

商品の背景を自分たちで調べて説明するものである。(写真7)

1月の実習では、地元の「深良用水」の研究を行った沼津城北高校の皆さんをお招きし、研究成果の展示を店内で行っていただき、地元の方々との交流を企画している。



写真7 「第2回 郷土研究部ショップ」
(2019・10. 19)

集団に立ち返るには道半ばである。伝統ある部の復活に向けて努力を続けて行きたい。

3. 考察と展望

「郷土」を「研究」する場合、探求すべきテーマを自分で見つけて文献を読み、フィールドワークや聞き取り調査をした上で、成果をレポートやポスター、発表スライドにまとめていくことが一般的な方法論である。しかし、そうした学術的な活動および指導が成立しないまま形骸化しているような学校では、顧問が専門性を発揮した指導を試みても生徒が全くついてこなかったり、大多数の意欲に欠ける生徒の前に真面目な生徒が埋もれてしまうことも少なくない。そのような中、限られた人数であったものの「合宿」の復活をきっかけに集まった中核メンバーが、地域住民との交流を重ねる中で、地元と関わることの楽しさを見出し、郷土研究部員としての自覚(クラブ・アイデンティティ)を確立する上で有効なものとなった。

今年度の試みは、部活動の再生のための一歩として位置づけられるものの、研究する生徒の